

大都市部の学生に対する ESD による地域創生

—全学共通カリキュラム「持続可能な地域創生と人づくり」における学生の意識分析—

前田 剛

本論は、地域が地域内のESDにとどまらず、大都市部に対してESDを行うことが極めて有効であることを示唆するものである。都市—農村は、農林水産物や観光サービス等の供給と消費において相互依存関係にあり、都市の大量消費等が引き起こす地球規模の環境問題が地域に深刻な影響を及ぼしていることから、地域の現状課題を都市住民に伝え、関心を高めることは両者の存続において重要なアプローチと言える。アプローチの有効性を検証するため、地域側が大都市部の学生に対するESDを行い、その結果、都市—農村のつながりや地球規模の問題との関連性を俯瞰し、地域の課題を自分事に捉える学生の意識変化が見られた。

1. はじめに

ESD研究所を擁する立教大学は、「PRO DEO ET PATRIA」（普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために）を教育理念とし、「広い視野に立って物を見て自分の力で考え、当事者、市民、他の専門家などと共に困難な課題を解決する意欲と力を持つ人材」を育てるため、幅広い教養と専門性を養うリベラルアーツを重んじている。そのリベラルアーツを具現化した教育科目群が1997年度から全面展開されている「全学共通カリキュラム」（以下、全カリ）である。全ての学部生を対象に、「専門分野の枠を超えた幅広い知識と教養、総合的な判断力と優れた人間性を養う」ことを目的とした教育アプローチは、教育理念、ひいてはSDGsの達成に資する立教大学オリジナルのESDと言えよう。

本論では、2020年度春学期に開講された全カリ「持続可能な地域創生と人づくり」（担当：阿部治ESD研究所長）において筆者がゲスト講師として講義を行った際に実施した学生意識調査や小レポートを通じ、大都市部の学生に対するESDが地域創生に果たす役割や意義について考察する。

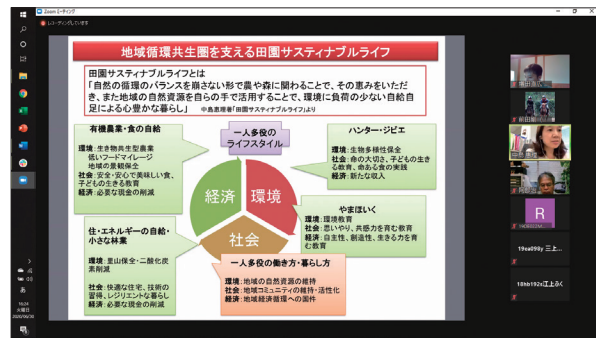
2. 講義と意識調査概要

(1) 全体講義概要

全カリ「持続可能な地域創生と人づくり」は、「持続可能な地域づくりの現状と課題・方法などを学ぶことで持続可能な地域づくりに主体的に参加する能力を育む」ことを目標に掲げた講義である。阿部所長の基調講義で持続可能性の視点から国内外の課題を俯瞰した後、政府、地方自治体、NPO、自然学校、メディア等学外の多様なゲスト講師から最先端の知見を得るオムニバス形式が採られた。筆者も末席に名を連ねていただいたが、例えば、我が国におけるSDGsのローカライズ（「地域循環共生圏」）を推進する中井徳太郎環境事務次官（当時、環境省環境政策統括官）等ゲスト講師陣は各分野で活躍する一級の実務家であり、比類ないESDの大学講義である。講義の訴求力の高さに加え、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大予防のため講

義がオンラインとなり、キャンパス間の移動を要しないため、新座キャンパス（観光学部、コミュニティ福祉学部、現代心理学部）の学生含め全学部から200名の学生が履修した。

講義の特色として増田直広ESD研究所客員研究員が山梨県からリモートで管理・ファシリテートしながら講義が進められた。また、Zoomのチャット機能やアウトブレイクルーム機能を駆使しながら、毎回、講師と受講生、並びに受講生間で活発な討論が行われた。



講義例 中島恵理氏（環境省）

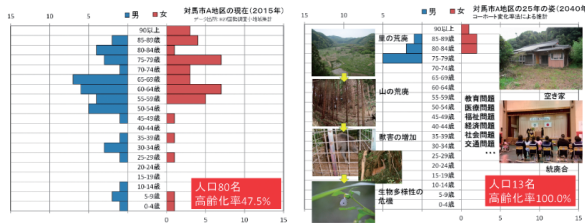
(2) 筆者担当講義概要

筆者は第4回目（2020.5.26）の講義を担当し、ESDによる地域創生の事例として、長崎県対馬市での実践を紹介した。当日は以下のように講義を展開した。

- | | |
|-----|---|
| 第1部 | 「対馬」という島（対馬の概要説明） |
| 第2部 | 地域（対馬）の現状課題（地方の過疎問題と地球規模の環境問題が地域に与える課題説明） |
| 第3部 | SDGsによる政策統合と「自立と循環の宝の島対馬」へ（対馬市SDGs未来都市計画説明） |
| 第4部 | ESD—持続可能な地域の担い手づくり（対馬におけるESDの取り組み説明） |

本講義では、オンラインによる学びでもできるだけ現場のリアリティを感じられるような工夫を施した。第2部において、以下のような過疎地域の現状と将来予測のスライドを画面表示しながら、「もしシミュレーションのような人口構造になってしまった場合、この集落ではどのような問題が生じるでしょうか?」という問いを学生に投げかけ、

Zoomのチャットに自由に書き込んでもらった。その自由記述を踏まえながら、環境・社会・経済の3側面から過疎地域の将来予測を解説し、その上で、「持続可能な地域創生(地域づくり)はなぜ必要?」と問いかけ、同様チャットに記入してもらった。



対馬市A集落の人口の現状(2015年)と将来予測(2040年)

あらゆるつながりがブラックボックス化される都市生活において、過疎・離島地域で生じている問題は無縁のように思われがちである。講義では、過疎・離島地域が都市部に農林水産物や観光サービスを提供し、都市住民の消費活動によって地域の社会経済が維持されているという都市-農村の相互依存関係を説明した上で、都市生活が持続的であるためには、過疎・離島地域の問題を自分事として向き合うことが重要であることを伝えた。さらに、人口減少による産業の衰退、里地里山環境の劣化や生物多様性の危機等、アンダーユースによる地域課題だけでなく、現場では、地球規模の環境問題によって、温暖化による磯焼けや海洋プラスチックごみ等、オーバーユースによるグローバルな課題に直面していることも伝え、だからこそ、グローバルな視点で総合的に行動していくこと、つまりSDGsの推進が重要であることを訴えた。

つづいて第3部では、対馬市SDGs未来都市計画の全体像を説明した。学生にSDGsをより身近なものに感じてもらえるよう、対馬市における海洋プラスチックごみ問題を切り口としたサーキュラーエコノミーの推進と、その経済性の還元による環境配慮型経済の活性化と持続可能な地域づくりの担い手確保・育成について説明した。

最後の第4部では、SDGsの推進基盤がESDであることを伝え、対馬市での実践として、「域学連携」や長崎県立対馬高等学校の「ESD対馬学」の事例を紹介した。

域学連携とは、地域と大学との連携による地域づくりのことで、提唱した総務省は「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」と定義づけている。大学教員が中心的存在である産学官連携に比べ、域学連携は学生が中心であり、都市部の学生の活力・感性、そして指導教員等の専門性等のアウトリーチによって過疎地域を活性化させようという特徴を有する。対馬市では、交流人口・関係人口拡大の重要政策の1つとして2013年度から域学連携を推進している。基礎自治体には珍しく、域学連携に関する政策分野別基本計画「対馬市域学連携地域づくり推進計画」を2014年度に策定し、「世界に先駆けた域学連携とESDの拠点として、多様な人々との交流と学び合いを推進

し、グローバルな視野と行動力を持った人財を育む」ことを基本目標の1つに掲げた。この計画に基づき、対馬全体を国内外複数の大学のサテライトキャンパス「対馬学舎」に見立て、現場での「学び」というサービスへの対価として、離島地域に不足しがちな労力や若いエネルギー、専門性を学生・教員に提供してもらっている。

プログラムは、①総合的に地域おこしを実践形式で学ぶ「島おこし実践塾」の開催、②分野ごとの学生実習「現場学」(中長期インターン)の受入れ、③対馬に関する「学術研究奨励補助」、④対馬をフィールドとした大学の合宿・研究等のサポート、の4つである。また、複数の大学と連携協定を締結し、分野ごとの共同研究(立教大学、九州大学、東京農業大学、明治大学等)や個別インターン(立教大学、筑紫女学園大学等)の受入れに取り組んでいる。また、これらの活動成果を対馬に還元し、地域活性化や市民の誇り意識の醸成のため、年に一度「対馬学フォーラム」を開催している。毎年600名を超える学生・教員が来島し、内100~200名はリピート参加者である。対馬市では、域学連携の実践を通じ、関係人口は「地域での深い学び」があつてこそ生まれるものであり、域学連携は関係人口形成のきっかけとして大きな役割を有していることを示した(前田、2020)。

域学連携における学生活動の例として、実際に対馬に来島した立大生の活動例を紹介することで、同じ立大生として親しみを持ち自分に置き換えながら具体的にイメージできるよう工夫した。そして、全国の学生約280万人の7割が3大都市圏に偏在し、都会生まれ育ちの学生が大半を占めるようになった構造変化に触れながら、現場での実践活動を通じ過疎・離島地域の現状を知り深く考えてもらうことは日本社会・地域社会・離島全体を維持していく上で大変重要であることを訴え、対馬市の域学連携プログラムへの参加を促した。2020年度においてはコロナ禍で十分な学生受け入れができないことから、域学連携の新展開として2020年9月に開講した「対馬グローバル大学」を紹介し、オンラインでも現場の学びの機会を提供する旨を伝えた。

プログラムに参加した立大生

年	人	学部・研究科
'13	5	観光学部(3)、社会学部(2)
'14	4	観光学部(3)、異文化コミュニケーション研究科(1)
'15	5	観光学部(3)、社会学部(1)、社会学研究科(1)
'16	11	観光学部(3)、社会学部(6)、社会学研究科(2)
'17	13	観光学部(3)、社会学部(5)、経営学部(2)、法学部(1)、社会学研究科(2)
'18	8	観光学部(2)、社会学部(5)、社会学研究科(1)
'19	15	観光学部(1)、社会学部(7)、文学部(7)

対馬市の域学連携に参加した立大生一覧

最後に、対馬市における学校教育でのESDの実践例として長崎県対馬高等学校「ESD対馬学」を紹介した。

ESD対馬学は、ユネスコスクールとして、2017年度から

同校が取り組んでいる持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育活動である。グローバルな視野を養い、対馬が抱える地域課題に対して主体的に行動できるよう、普通科、国際文化交流科の生徒約120名がSDGs、対馬の環境、社会、経済について学び、グループワークを通して探究し、高校生視点での提案をポスターや新聞等にまとめている。

講義では主権者としての政治への参加意識、世代間公平性、国際協調など高校生の考え方を伝えることで、都市部と離島の若者の意識を比べてもらう工夫を行った。

(3) 意識調査概要

東京一極集中に伴い地方との関わりが希薄化することは、農山漁村・離島の持続性を考える上で、非常に重大な問題である。2020年10月1日現在の立教大学の学生数は20,098人（大学院生含む）で、多くが関東出身であることから、筆者は以下のようなリサーチクエスチョンを思い描いた。

「関東出身学生の地域創生やSDGsの関心傾向と地域活動の経験有無はどのような状況にあり、筆者の講義を聞いて、どのようなことに気づきと印象を持ち、持続可能性に関してどう意識変化が生じるか」

この問いを明らかにするため、講義開始時と終了時にwebアンケートへの回答を学生に依頼した。また、講義後に小レポートの提出を依頼した。調査・レポート項目は以下のとおりである。

<講義開始時アンケート調査項目>

- Q1. 今、オンライン講義で使用しているデバイスは何ですか？
- Q2. 今の気分はいかがですか？
- Q3. 「対馬」と聞いて、イメージするものは何？
- Q4. 「地域創生」で関心のあることは何ですか？
- Q5. 大学在学中に体験したことのある地域活動は？
- Q6. SDGsについてどの程度知っていますか？
- Q7. SDGsの17の目標のうち、最も関心のある目標は？
- Q8. 性別
- Q9. 所属学部
- Q10. 学年
- Q11. 出身

<講義終了時アンケート調査項目>

- Q1. 講義はいかがでしたか？
- Q2. どの内容が良かったと思いますか？
- Q3. 特に関心を持った内容をお聞かせください
- Q4. あなたも対馬の「域学連携」に参加してみたいですか？
- Q5. どの域学連携プログラムに参加してみたいですか？
- Q6. 対馬市ではSDGs推進の一環として、海洋プラスチックごみの現状等を学ぶスタディツアーを企画しています。募集があれば参加したいですか？
- Q7. 「対馬グローバル大学」の開校準備を進めています。

受講対象は市民を想定していますが、あなたも参加してみたいと思いますか？

- Q8. 性別
- Q9. 所属学部
- Q10. 学年

<講義後の小レポート>

- Q1. 第4回授業の気づきや印象に残っていることを書いてください
- Q2. 行政のSDGs推進に対し、学生の皆さんが望むことは何ですか？
- Q3. その他自由回答

3. 調査結果

(1) 受講学生の特徴

筆者の第4回目の講義には、163名の学生が受講し、講義開始時アンケート調査により、図1, 2のような学部・学年・出身構成であることが分かった。出身地は関東が76.8%と大多数を占めていた。

学生の地域創生に関する関心は少子高齢化、観光業、教育、SDGsが高く（図3）、SDGsについてはゴール4と11が高かった（図4）。地域に対する関心は高いものの、実際に地域活動を経験している学生は多くはなかった（図5）。

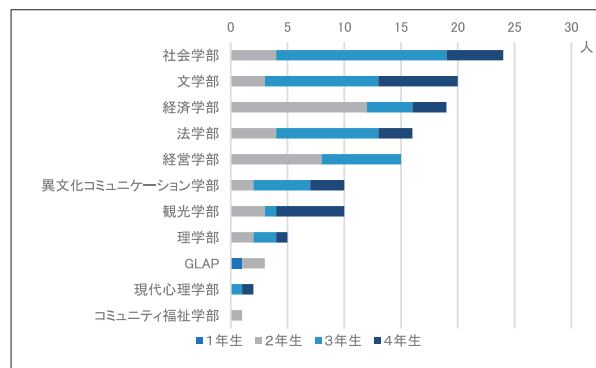


図1 受講生の所属学部・学年構成 (N=125)

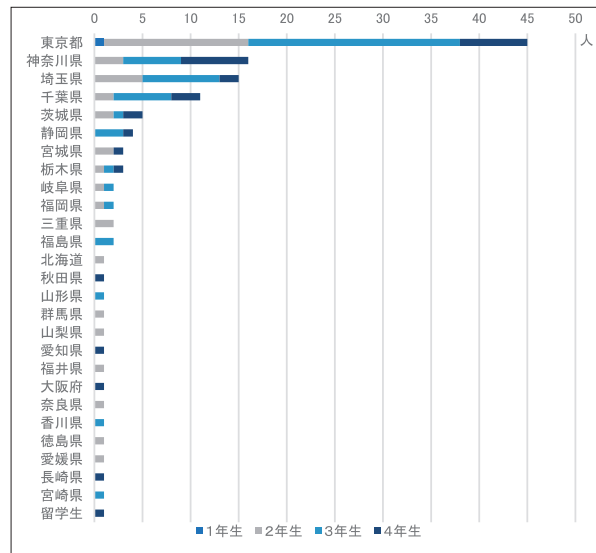


図2 受講生の出身構成 (N=125)

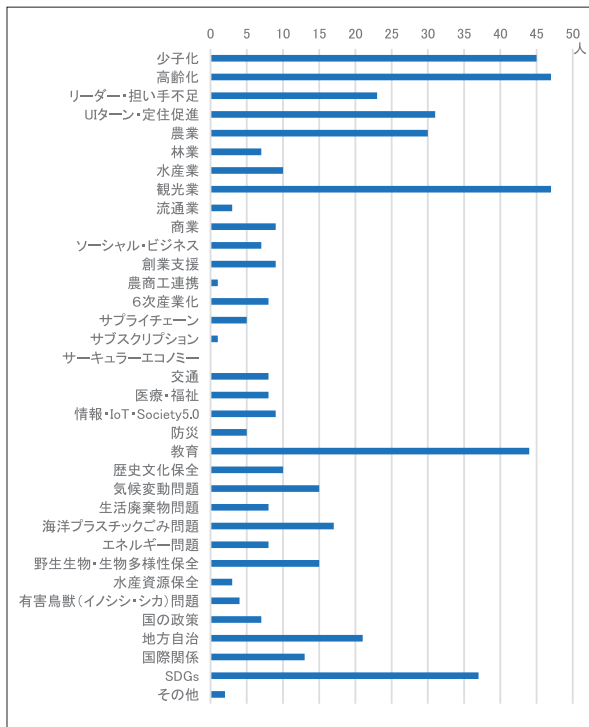


図3 地域創生関心事項 (N=125, MA=3)

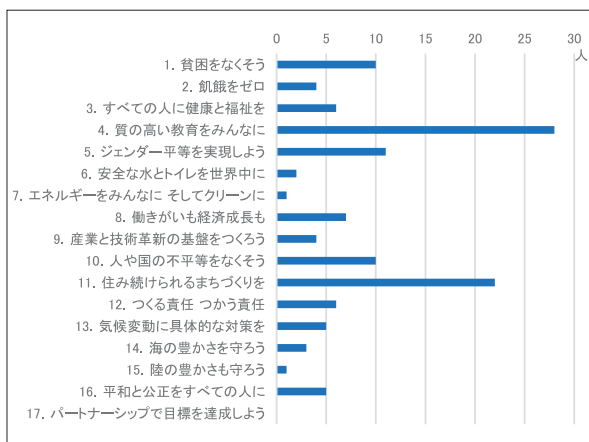


図4 SDGsの目標のうち最も関心のある目標 (N=125, MA=4)

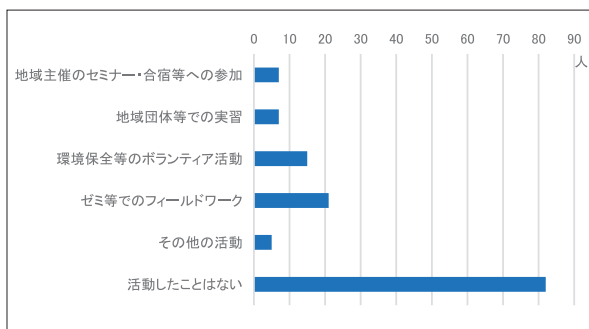


図5 大学在学中の地域活動経験 (N=125, MA=4)

(2) 講義への反応

講義終了時のアンケート結果を見ると、特に地域（対馬）の現状課題についての内容がよかったという反応が得られた（図5）。対馬市の域学連携プログラムに対する参加希望は75%に達し（図6）、現場で現状課題を知りたいというニーズが強く感じられた。

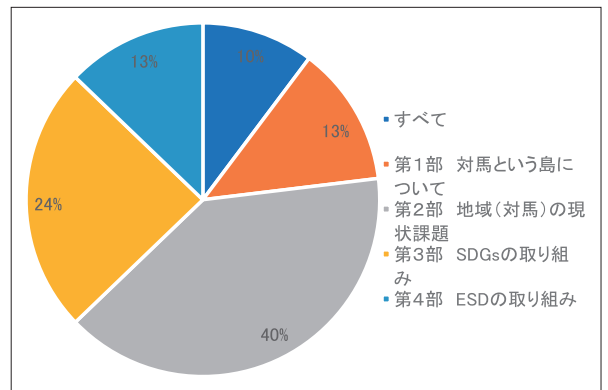


図5 第4回講義でよかった内容 (N=78, SA)

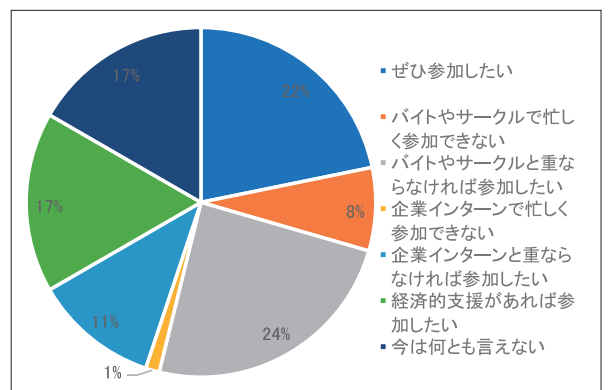


図6 対馬の域学連携への参加希望 (N=78, SA)

(3) 学生意識のテキストマイニング

講義後の小レポートの自由記述データの解釈について、筆者の主観的な解釈を回避するために、テキストマイニング手法を用いて分析を行った。自由記述から語を取り出し、頻出語の出現パターンの似通った語をネットワーク状に描き、学生たちの意識の可視化を試みた。分析には樋口耕一が作製・公開しているKH Coderを用いた。

分析データは学生163名の自由記述を対象とした。分析手順は、KH Coderによってテキストファイルの前処理を行い、「共起ネットワーク」を用い、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワーク図を描画した。分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を5に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を70に設定した。また、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画し、語の色分けは各語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す「媒介中心性」で表現した。

「第4回講義の気づきや印象に残ったこと」に関するテキストマイニングの結果は図7のとおりである。この図から、都市-農村、そしてグローバルの関係性、過疎化が引き起こす生物多様性への影響等について気づきや印象を与えたことが分かる。

出現数が多い複合語は表1のとおりである。出現頻度の多い語に関し、学生たちの「印象」「衝撃」や新たな「視点」獲得、「意識」変化はどのような文脈で用いられているのか、学生の実際の記述例を、KH CoderのKWICコンコーダスのコマンドによって以下のとおり抜粋する。

た場合に生物多様性を損なうという話が印象に残っています

- ・人口が減るといふことに対してあまり重く考えていなかったが、人口が減ると環境にも影響が及び、生物多様性がなくなってしまうということに衝撃を受けた

4. 考察

テキストマイニングで一部学生の感想を抜粋してもわかるとおり、気づきや印象の度合いは高かったことが分かる。出現数とは別に、都市－農村、グローバルとの関係性については、以下のような学生の記述が見られた。

<つながり>

- ・これまでどこか他人事だった地域社会が身近に感じたことが印象的でした
- ・対馬のような場所が衰退した場合、私達が口にする水産資源が枯渇してしまうかもしれないことは衝撃的でした。どこか、地域創生に対して他人事のような受け止め方をしているところもあったのですが、それが大きな間違いであるということに気づきました
- ・ローカルな問題とグローバルな問題は一見全く違う問題のように思われますが、実はつながっているということが印象に残りました
- ・都市と地方が相互に補完しあう関係で、地方の衰退が国の衰退につながるということまで意識していなかったことに気づいた
- ・対馬で起きている問題でも、それは対馬だけでなく、地球規模で解決しなければならない問題という視点はなかった
- ・今回の授業では、自分の住んでいる場所から遠い地域だから自分には関係ないというのではなく、私達も意識を持つことが大切だと思いました

これらの記述からは、都市、農村、グローバルそれぞれの問題が別々のものとして捉えられてきたことが分かる。「グローバルという言葉やSDGsがいかに大きな意義を持つかということを経験してきたことからの実感を持っていませんでした。しかし、今回の講義で新たな視点を持つことができました」という学生の記述のように大都市部では学生の諸問題のつながりに対して実感を持ちづらいのが実態のようである。今回の講義で、対馬という具体的なケーススタディを通じて、つながりを明確に理解できたと考えられる。

対馬市の域学連携プログラムへの参加を希望する記述も複数見られ、潜在的に地域の現場で学びたいというニーズが具現化されたことも特徴的である。さらには、「環境を守る意識や術などを学び、池袋や地元に戻りたい」という身の回りから行動していこうとする意欲的な記述や「私は地方の出身ですが、私のような地方から出てきた若者が、地方に就職することによって自分も地方を元気づける力に

なることができると考えた」というふるさと回帰意識を引き出しているような記述も見られた。

このように、地域の視点から捉えた地域創生やSDGsに関するESD（講義）は大都市の学生の意識に大きく影響を及ぼしていることが分かる。地域内でのESDにとどまらず、大都市部の学生等にアプローチしていくことが、地域の持続可能性を維持・向上させるために重要であろう。

5. おわりに

おわりに3人の学生の記述を紹介したい。

- ・「グローバル化」という言葉を多く耳にするようになった現代において、私たちはよくローカルな部分を見無視してグローバルな視点に目が行きがちであるということを再認識することができた
- ・これまで、地方に財政を投資するのではなく、中央に人口をより集中させたほうが効率的であると漠然と思っていた

ローカルな部分を見無視してグローバルな視点に目が行きがちであること、都市優先主義的な思考に対する学生自身の反省が感じられる。こうした視点・思考を持つ学生は少なくないと思われる。国の大学機能別分化政策による弊害であることも考えられるが、グローバルな視点・思考を持てるようになることこそ、立教大学の教育理念に沿った立教人を輩出することができると感じている。とりわけ、立教大学は各界で活躍する人材を数多く輩出し、大企業への就職割合も高い。SDGs達成の重要な鍵は企業の主体性と本気度であり、その企業人形成のためにも、立教大学という大都市部の学生に対するESDは極めて重要な課題であろう。ただし、以下のような学生の記述にあるよう、大学生に対するESDだけでは不十分で、小中高大と一貫性のある教育システムを構築することが根本的には最大の課題のように感じられる。

「前田さんの講義内容が心に響かなかったということではなく、今までこういった学習や体験をしてこなかったことで当事者意識が持てず、気付いたときには参加する余裕がないことが問題だと思います。小学校、中学校、高校でこういった体験をしていたかった、もっと早く知っていたら何かできることがあったかもしれないと強く感じています」

参考文献

前田剛（2020）：域学連携による関係人口づくり－長崎県対馬市を事例に。人間環境論集, 21（1）：51-84.

前田剛（まえだ・つよし）対馬市しまづくり推進部SDGs推進室副参事兼係長。1979年長崎県雲仙市生まれ。立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士課程前期課程修了。立教大学ESD研究所客員研究員。